

竹
灯
籠
の
タ
ベ

十二月三十日（金）

*都合により本年より
日程を変更します。

夜6時
夜6時半
〜お勤め（正信偈）

誰でも、どのようにならぬのか――
 そればかり、いつ、どこで、どうして死のう
 と――
 それには何のかかわりなしに、間違いな
 く、安樂浄土に往生させていたたく――
 このことは、
 褒められようと―― 謗（そし）られよう
 と――
 誰に何と言われようとも――
 断じて動ずることのない――、
 たしかに、たしかに安心です。
 これは、阿彌陀如来よりたまわった――
 金剛堅固の信心です。

被災地「宮城県」を訪ねて

東日本大震災の被災地宮城県を訪れた。

震災発生以来延べ
数百名の龍谷大学
生が現地でボラン
ティア活動を行っ
ており、現地スタ
ッフへの挨拶と学
生達の激励を赤松
学長と共に行った



あつたが、住宅は壊滅し、田畑も海水に浸されていまだ草も生えていない状態である。
 仙台空港から西本願寺の対策本部が設置されている仙台別院に向かつた。途中、至る所に震災の爪痕が残つていたが、最も衝撃的な光景は、海岸からはるかに離れた田んぼや道沿いに不自然に横たわる、数隻の漁船の姿であつた。
 人の力で運ぶことは容易ではないであらうが、いとも簡単に流し込んだ津波の威力をまざまざと実感した。
 その後、学生達が活動する七ヶ浜町へと向かつた。七ヶ浜町とは七つ

その後、学生達が町へと向かった。七の浜集落からなる町が大変のどかな海岸が、現在は、見るも態に破壊されてしまっていた。

元気に活動する学生達を励まして、滞在時間がわずか数時間という強行日程で帰路についた。



私が訪れたのは、震災から約九ヶ月を過ぎようとしていたが、その生々しい傷跡は、まだまだ随所に残

まず空路で仙台空港に到着した。

像は強く目に焼き付いているが、仙

は、いまだに「荒野」と呼ぶに相應



の震災の姿を一度も
本の将来を語る人は
との言葉に素直にう
きた。同時に「震災
ツコツと永きに渡る
とが大切だ」との現

前号からのつづき

親鸞聖人は、

天親菩薩論註解
報土因果顯誓願

天親菩薩の「淨土論」の註釈書を著して、往生淨土は弥陀本願力によることを明らかにされました、と詠まれています。

○他力本願

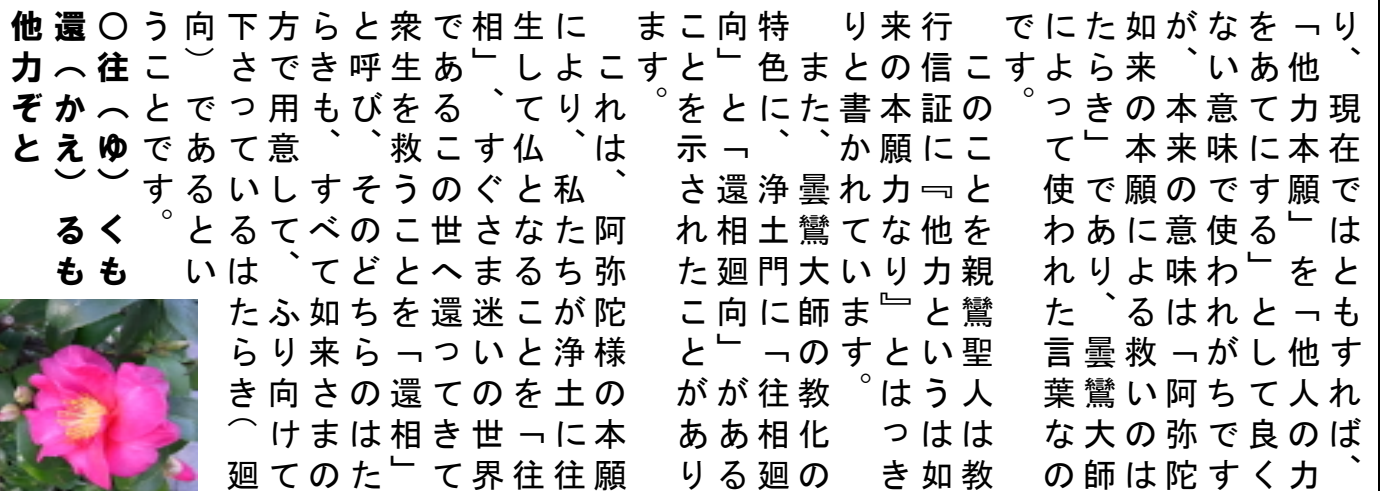
さて、曇鸞大師で特筆すべきことのひとつに「他力」という用語を初めて用いられたことがあります。

以来千五百年間、浄土教の用語として深く意味づけられてきましたが、

「仏教用語の解説」

①（会報44号）

でも述べました通



私は若い頃に、正信偈の「意訳に『往くも還るも他力ぞと』」とあるのを読みながら、なんでもわきながら、またお浄土へ行きながら、またこの世に還って来なければならぬのかと疑問に思ったことがありました。

阿彌陀様の本願は「あらゆるすべてのものを等しく救いたい」という「利他」の願いにより立てられたものです。

浄土に往生する「自力」だけでなく止まっていたならば、確かに阿彌陀様の本願により往生したとはいえないでしょう。

自らが浄土で仏となつたならば、そこから本當の活動の始まりで、さとり（他）へと向かうのです。

浄土教がもし往相だけを説く教で、還相を説かなければ、大乘仏教とはいえず、だからこそ、曇鸞大師は往還の二相を明らかにされたのです。

親鸞聖人が歎異抄で「私は父母の孝養のために念仏

